ヘミングウェイの戦争に対する両面感情

播磨谷　一　雄

Hemingway's Ambivalent Feelings to War

Ichio Harimaya

(昭和47年10月31日受理)

I

Hemingway はその処女作といえる 'In Our Times' の各短篇に付した epigraph の中で，戦争の生生しい場面を克明に描写している。それは彼の第一次大戦参加の鮮烈な体験の描写であった。この体験はその後の彼の文学生活に大きな影響を及ぼし，スペイン内戦，第二次大戦と彼が直接，戦争に参加しないまでも報道員として彼を参加させることになったのである。

この間の彼の経験を述べたものとして，'Farewell to Arms', For Whom the Bell Tolls' があり，それらの戦争に参加した後の心境を述べたものとして，'Across the River and into the Trees' があると考えられる。また，第一次大戦後の帰還兵の行状を述べたものとして 'The Sun Also Rises' があり，更に多くの短篇小説においても，戦争の経験が述べられ，戦争は彼の文学の重要な要素になっているといえる。

彼をかくも戦争に興味を示させ，間接的にでも参加させずにおかなかったものは一体何であったのか，彼の政治理念によるものか，それとも戦争についての偏執的ともいえる興味の故であったのかという疑問が生じるのである。

彼の参加した一連の戦争を考察していくと，それらの戦争のいずれもが，反ファッシズムの戦争であったことがわかる。この彼の反ファッシズムの態度は，スペイン戦争において頂点に達し，その後の第二次大戦を通して一貫して維持されることになった。その意味ではスペイン戦争は，反ファッシズムの終わりではなく始まりであった。この一貫した彼の反ファッシズムの態度は1945年に第二次大戦が終了するまで続くのである。しかし，それは直ちに彼が確固たる政治理念をもって行動していたことを意味するものではない。これは彼が最も社会的関心を示したといわれるスペイン市民戦争を描写し，社会的転向を評された作品，'For whom the Bell Tolls' の主人公，Jordan の政治意識の希薄さをみれば明白である。彼は自身がマルキストではなく，アメリカ，フランス独立の理想である自由を信奉する理想主義者にすぎないと述べているのである。(1) Hemngway にとって，ファッシズムは人間の最も基本的な個人の自由を侵害するものとして，許すべからざる存在であったが，政治に関しては Jordan と同様，あくまで個人の自由を信奉する自由主義者にとどまったように考えられる。

さて，彼は 'Death in the Afternoon' の中で，

> The only place where you could see life and death, i.e., violent death now that the wars were over, was in the bull ring...(2)

と述べ violent death に対する彼の偏執的な興味を示している。この一節が示すように，彼の戦争参加の態度の中に，violent death に対する強い魅力があったことは認めなければならない。それはまず，戦争の残虐さそのものに寄せる関心であった。彼は 'A Natural History of the Dead' において，戦争における人間の様々な死に方について虚無的な，冷笑的ともいえる洞察を加えて，戦争の残虐さを伝えている。その他，戦争に関する多くの作品の中で，数々の残酷な場面の描写がみられる。彼はそのような彼の描写態度について，'Death in the Afternoon' において，彼自身が経験した実際の感情を伝えようと努力し，それが真実のものであるならば10年後も，あるいは，永久に不変のものとなるだろうと述べ，更に

> I was trying to learn to write, commencing with the simplest things, and one of the simplest things of all and the most fundamental is violent death.(3)

と，violent death に対する彼の基本的な創作態度を示している。即ち，彼にとって戦争における violent death の描写は，単なる残虐さの描写にとどまらず，読者に彼が経験した実際の感情 (real emotion) を伝えようとする努力であったのである。

又，一方，彼の興味は戦争という極限状況におかれた人間，その人間の美しさ，高貴さ，強さ，逆の醜さ，卑

烈さ，弱さの面にも向けられたように考えられる。彼は戦争において，日常の生活ではみることのできない人間性の一面を観察することができ，それも又，戦争という特殊社会において見出される人間性の真実であると考えたのである。そのような戦争の真実を伝えたいという彼の志向は，彼の戦争に対する関心をそそる一つの重要な理由と考えられる。

それらの真実は彼に強い興味を与えはしたが，同時にそれとは逆の深い嫌悪感を与えるものであった。その嫌悪は軍隊における団体と個人の相克から生じているように考えられる。軍隊においては，軍時的必要性が兵隊個人の道徳的信念に優先するのである。戦争における非人間性についての苦悩は，彼の戦争小説の主人公達，Henry, Jordan, Cantwell の思想態度の中に共通してみられるものである。例えば，彼らは軍司令部の命令に対しては，その命令を遂行する一つの道具として絶対に服従し，遂行しなければならない。そこに人間的感情は許されないのである。このように個人の人格が極端に萎少化されることにより深い嫌悪感が生じるのである。

しかし，前述のように戦争は文学者としての Hemingway が描こうとする最も基本的な violent death を含むものであり，極限下の人間性の観察の面からも，尽きることのない魅力を兼ね備えたものであった。ここに彼の戦争に対する ambivalence な態度がみられるのである。彼がそのような戦争の両面性を，その作品において，どのように描写しているか，又，彼が感じていた両面性は彼の戦争観にどのような影響を及ぼし，それを特殊なものにしたかを考察するのが小稿の目的である。

II

この章においては，Hemingway の戦争に対する愛着及び関心が彼のどんな思想から生じ，作品においてどのように表われてくるかを考察したい。彼の戦争についての関心を考察していく場合に，彼の戦争に対する基本的描写態度から考察を進めなければならない。

彼は 'Green Hills of Africa' において，作家と戦争体験について次のように述べている。

> I thought... about what a great advantage an experience of war was to a writer. It was one of the major subjects and certainly one of the hardest to write truly of,...(4)

ここで彼は戦争体験は，作家にとって非常に貴重なものであり，戦争は大きな主題となりうるが真実の姿を描くには最も困難なものだと述べている。この言葉を I における(3)の引用と併せて考えると，彼が戦争体験に異常な執心を持ち，最も困難と思われる戦争の真の姿を描写しようと真剣に考えていたことが想像される。

彼は又，'Death in the Afternoon' において，多くの作家は violent death を不明瞭に描写しているが，その理由は作家がその瞬間に精神的にも肉体的にも目を閉じてしまうからだと述べ，子供が汽車にひかれる場面を例に上げて，それは思わず衝突の瞬間に目を閉じてしまうのと同様であり，単に子供が汽車にひかれたという事実を伝えるだけで実際の印象深い場面は anti-climax に終わってしまうと述べている。(5) 彼は目を閉じず，実際に起きた行為 (action) を描写し，彼が経験した感情 (emotion) を確実に伝えようと決意しているのである。以上から Hemingway が戦場の violent death に対し目を閉じることなく，その真実をあるがままに伝えようと努力していたことがわかる。

このような戦争への志向が彼を進んで前線に赴かせ，violent death にできる限り接近しようという基本的態度になっているのである。彼の戦争における真の姿の観察は，目をおおうばかりの戦場の残酷さと，戦争という極限下における人間性との二面に注がれているように考えられる。前者の例は，彼の戦争を扱った作品の随所に見られるが，特に前述の 'In Our Times' の短篇に付された Epigraph や 'Natural History of the Dead' において顕著である。

'The Battler' という短篇に付した Epigraph においては，捕虜にされた敵の閣僚の銃殺場面が描写されている。腸チフスを患う閣僚の一人は立つこともできぬ状態であり，銃殺の場所に兵隊が担いで運び彼を無理に立たせようとするが，水たまりの中に坐り込んでしまう。その状態で彼は銃殺されるのである。

> When they fired the first volley he was sitting down in the water with his head on his knees.(6)

瀕死の状態にあるその閣僚の死は，銃声の後，膝の上に頭を伏せるという単純な動作で示されるが，この銃殺場面はその単純な描写により更に強い emotion を我々に伝えるように考えられる。Hemingway は非情とも思われる観察眼をその閣僚の銃殺場面に注ぎ，克明に描写することにより，戦場における残酷さの真の emotion を伝えようとしているのである。

又，'Natural History of the Dead' においては，死についての日常社会の通念を破壊するという意図のもとに，彼が見聞した戦場での様々な死や死体の状況が赤裸裸に描写されている。それは正に死者の博物誌であり，目を被うばかりの戦場の惨状である。そこにはこの世は死と暴力の世界だという彼の認識ばかりでなく，戦争に対する耐えがたい程の嫌悪感が感じられるのである。

以上のように戦争における真の姿を求めて violent

death の最も多く見られる戦争に接近し，仮借なき観察眼を注いだ Hemingway は，戦争という巨大な流れの蔭にあってともすれば忘れられがちな人間の姿に人間性の美醜を見出した。それも又，彼が伝えようとする真実であり，彼が戦争に愛着を感ずる一要因になっていると考えられる。

'For Whom the Bell Tolls' の中で，Jordan は Pilar の語る共和政府側の農民によるファッシストの虐殺の物語に深く感動して彼にその物語を書くだけの筆力が備わることを望んでいる。(7) これは云うまでもなく Pilar の話の中に，戦争という極限下における人間性の美醜を見い出した Hemingway の声でもあったように考えられる。

その話の中では，小さな町を二分した革命の悲劇，互いに昔からの顔見知りである者を処刑しなければならない革命の悲情さや，処刑に参加した無智な百姓達の，ファッシストである町の上流階級に対する憎悪と酒に酔い暴徒化した農民の残虐性が語られている。革命に名を借りて土地を取り上げられた私怨をはらすために殺人を犯す百姓，妻を愛するがために名ばかりのファシストになり処刑される正直で貧しい木具商，その死を嘆く妻の姿など革命という名の下に現われる人間性の美醜が描かれるのである。

それは又，Hemingwey が目的とするもの即ち，ただ殺されて死んだという事実だけではなく，如何にして殺されて死んだかという過程から結末への描写であった。そのような描写態度こそ，彼の云う真実の emotion を伝える方法であり，その場面を体験するために戦争に参加しようという意欲が，彼の戦争に対する関心を形成する一つの要因になっているように考えられる。

さて，上述のような戦争における violent death に対する彼の接近態度の中にある種のスポーツに対する興味に類似した戦闘行為そのものへの興味が述べられているのを見逃すことはできない。'For Whom the Bell Tolls' において次のように述べている。

> In all that, in the fear that dries your mouth and your throat, in the smashed plaster dust and the sudden panic of a wall falling, collapsing in the flash and roar of a shell burst, clearing the gun, ... getting the broken case out, straighting the belt again... You learned the dry-mouthed, fear-purged, purging ecstasy of battle...(8)

砲弾の炸裂する閃光と轟音の中での戦闘行為は，Jordan にとって口も喉もカラカラになる程の恐怖を感じさせるものであったが，こわれた薬莢を引き出したり，弾帯を引き伸すという行為に精神を集中することにより，成すべき事を成しているという充実感を味わい，ecstasy を感じることができたのである。この戦闘場面の忘我の ecstasy こそ Hemingway を戦争に引きつけている要因の一つである。特に敵の激しい攻撃に耐え，最後に得た勝利の経験は忘れられない回想となって残る。'Across the River and into the Trees' の中で Cantwell 大佐は，

> Merde, he thought, we did very well that winter up at the junction. I wish I could fight it again, he thought. Knowing what I know now and having what we have now.(9)

のように述べ，苦しかった冬の戦いを回想している。これらの勝利の回想は，戦いの後に ecstasy を伴うという点で，スポーツの試合において夢中で戦い，勝ち得た勝利に酔い苦しかった試合を回想するのと酷似しているのである。

Jordan は戦闘の直前の精神状態について，

> ... it came now as steadily as a tide rising or the sap rising in a tree until he began to feel the first edge of that negation of apprehension that often turned into actual happiness before action.(10)

と述べている。これは戦闘直前の不安感が期待に満ちた幸福感に変化していく精神状態について述べたものであるが，スポーツの試合直前の不安と期待の交錯した精神状態の描写と殆んど同種の表現といえる。更に Jordan が戦闘が始まるや否や，Nice hunting, like hell, nice hunting.(11) と心中に叫びながら，ダイナマイトを手に急坂を駆け下りる場面，又，彼が Agustin に指示を与え敵の自動車を射撃させる場面は，戦闘中の快い緊張感を伝え，戦闘の充実感を述べたものに他ならない。

以上のような戦闘行為の中に認められる緊張感，充実感は，Hemingway が特に興味を示したスポーツ，闘牛や魚釣や狩猟におけるそれと同種のものでなかったかと考えられるのである。彼にとってそれらは死のスポーツとして同種の遊戯的要素を持っていたように思われる。戦争とそれらのスポーツとの共通点は，いずれも敗れれば死を意味することである。死が背後にあることを強烈に意識するが故に，現在の行為に全精神を集中することによって緊張感や充実感を感ずる生，これこそ Hemingway にとって最も意義ある生であり，彼はここに死のスポーツや戦争の魅力，即ち闘争への限りない魅力を見出したのである。闘争への魅力の根源をたどれば，アメリカ開拓時代の frontier spisit まで遡ることができるように思われる。原始林を切り開き，野獣や野蛮人という自然との闘争により，自然を征服し開拓を続けてきたアメリカの伝統的な姿が，Hemingway の戦争への愛着の中に見出されるように思われる。

Ⅲ

戦争の中に真実を見出そうと努力した Hemingway は，一方では耐え難い程の嫌悪感を経験することになった。その嫌悪感は彼の戦争を扱った小説の主人公の独白を通して，あるいは，物語の中で語られている。

最初に，'A Farewell to Arms' の Henry の場合から考察を進めたい。この作品は Hemingway が第一次大戦に衛生兵として参加した際の経験に基づいて書かれたものであり，彼が初めて参戦した印象が述べられ，その点では，Henry は Hemingway の分身といえる。

Henry にとって彼の参加している戦争は他国の戦争であり，社会見学的意味しか持たず，終始，傍観者的態度を維持する。彼は，

> I knew I would not be killed. Not in this war. It did not have anything to do with me. It seemed no more dangerous to me myself than war in the movies.[12]

と述べその第三者的立場を明瞭にしている。又，Catherine にイタリア軍に加わった理由を尋ねられて，返答に窮し，I don't know,... There isn't always an explanation for everything.[13]

と答えていることから，彼が明確な政治理念を持って参戦していないことは明白である。Henry にとって河上の攻撃は河上のショーであり，[14] この戦争は，いわば戦争に参加し戦争を見学し，体験するという意義しか持たないように考えられる。

このような第三者的意識で参戦した彼は戦争の残酷さに直ちに深い幻滅感と絶望感を感ずる。彼を戦線にとどまらせているのは，中尉としての義務感である。前線で負った怪我が治癒し戦線に復帰後まもなくオーストリア軍の総攻撃が始まり，退却を命じられる。退却の途中で，ぬかるみに埋まった彼のトラックを動かす手助けをしなかった2名の軍曹のうち1名を射殺することになるが，これは彼の義務感によるものであり，彼は上官の命令に服従しない部下を射殺するという軍律を履行しているにすぎない。彼の軍時的意識は，部下の Passini との会話から，

> I believe we should get the war over. It would not finish it if one side stopped fighting. It would only be worse if we stopped fighting.[15]

であり，強い軍時的責任を感じていることがわかるが，この義務感も軍時的な意識もイタリア憲兵による味方の将校の銃殺場面に遭遇し，彼自身も銃殺の危険に晒される時，崩れ去るのである。

憲兵は祖国を救うという大義のもとに銃殺を施行するイタリアの青年である。彼らは「自分は何ら死の危険にさらされないで死を扱う男の，厳しい裁判に対する美しい超絶と献身をもって」[16] 退却してくる将校を裏切者と断じ，処刑するのである。彼らは直接，前線で戦うことがなく，絶対的な権力を背景として，敗走の責任を他に転荷することにより合法的に殺人を犯しているのである。これらの憲兵は戦線の後方にあって冷酷に権力を行使し，接近してくるドイツ兵に対し完全な防禦態勢をしかず，自軍の将校の銃殺に没頭している。Henry はこれらの憲兵に深い嫌悪感を覚え，戦線を離脱するのである。彼は初めて戦争の真の醜悪な姿に触れ，軍隊における光栄，名誉，勇気，神聖などの抽象的言語の無意味さを知るのである。[17] Henry の嫌悪は，とりも直さず，19才にして戦争に初参加した Hemingway の嫌悪であったともいえる。それはこの戦争に熱烈に希望して参戦した当時の若者たちが感じたと同様な期待を裏切られたという幻滅感，絶望感であった。戦争は勇気や名誉などを示す冒険の場ではなかったのである。

次に 'For whom the Bell Tolls' の Jordan の嫌悪について考察したい。Jordan は一理想主義者として描かれ，確固たる政治理念は持たないが，共和主義の心からの信奉者である。従って，彼のすべての行動はこの強固な理想に支えられ，軍律に対しても厳密にこれを遵守し，Golz 将軍から与えられた橋梁爆破の使命を絶対的な至上命令として，彼自身の人間的欲望は払いのけても逐行しようとする。彼は「自己の生命はただ任務を果すための道具である。」[18] と信じようとし，強く自己を抑制するが，命令それ自体の意義についての疑問，共和軍の指導者層に対する不信感が生じるのをどうすることもできない。それは彼自身や仲間の生命の損失という人間的苦悩や計画逐行の困難性に結びついて深い苦悩を形成していく。その苦悩は正に軍隊という組織社会と個人の感情との相克といえる。例えば，実行しようとしている爆破計画がすでに敵に知れ，初期に意図した効果が全く得られないことがわかるのに，自己の生命や仲間の生命を犠牲にしてまで，計画を逐行する意義があるのかということが問題になるのである。

この問題は軍隊における命令の絶対性を理解している Jordan の super ego 的な意識で強く規制され，一応は解決された形になり懐疑心は抑制されているが，ここで作者，Hemingway が軍隊における命令の絶対性についての疑問や軍の指導者たる軍司令部に対する不信感を表明していることは明白である。

この不信感は Andrès が伝令に出た際の軍司令部における命令系統の不手際においてより明瞭に示されている。Andrès は敵線は難なく突破するが，逆に味方の共

和軍内で手間どることになる。彼は共和軍の政治首脳の一人，Massart により直ちに逮捕され急書を取り上げられる。Massart には Andrès がファシスト軍の後方から使わされているので彼がファシスト側のスパイのように思われ，その宛先が Golz 将軍であるので，彼ら二人は敵に内通し裏切行為を行なっているようにみえるのである。Massart は実戦には関与せず，机上で作戦計画を作製するだけの実戦を知らない政治家である。Hemingway は実戦に携わることのないこの種の政治家に対して激しい嫌悪を示し，次のように述べている。

He was engaged in war. In his mind he was commanding troops; he had the right to interfere and this he believed to constitute command. So he sat there with Robert Jordan's dispach to Golz in his pocket and Gomez and Andr`s waited in the guard room and Robert Jordan lay in the woods above the bridge.(19)

Massart は政治首脳として作戦製作上の絶対的権力を持つが，机上でのみ戦争を考え，地図上の高地や谷の持つ実戦上の戦略的意味など全く念頭になく，あるのは彼自身の野心と Golz 将軍に対する敵意にすぎない。橋梁攻撃の時を森の中で腹ばいながら待つ Jordan の姿と，彼からの急ぎの使者を詰所で待たせ平然としている Massart の姿が鋭く対比されて前線と後方の指令部との意識の相違が描かれている。それは又，前線に位置し直接実戦に携わる者に対する Hemingway の好意と，前線のはるか後方に位置し，しばしば妥当性のない命令を発する軍の指導者層に対する嫌悪を示すものである。軍司令部からの命令であれば，こういう種類の指導者からの命令であろうとも至上命令であり，拒否することは許されないのである。

'Across the River and into the Trees' においても，同様な事態を Cantwell 大佐は，Jordan の場合より更に苦渋に満ちた体験として回想している。彼は第二次大戦において，不可能とわかっている命令を遂行したために，彼の連隊の兵士の殆んどを失うのである。その命令が発令されたのは次のような理由によるのである。

... because they read the name of the town in a newspaper, possibly sent in from Spa, by a correspondent, and the order is to take it by assault. It's important because it got into the newspapers. You have to take it.(20)

即ち，その地が重要な攻撃目標となるのは，その町の名が新聞に出たという単純な理由によるものである。そのような理由で一個中隊を全滅させるような戦闘が行なわれるのである。又，発令者について，

This has been rigidly confirmed by some politician in uniform who has never killed in his life, except with his mouth over the telephone, or on paper, nor ever has been hit.(21)

と述べ，In our army you obey like a dog,... you always hope you have a good master.(22) と結んでいる。「軍隊における犬のような服従」，「良い主人」という Cantwell 大佐の言葉の中に作者，Hemingway の軍隊という組織社会に対する激しい嫌悪を感ずることができる。

Hemingway の後方司令部に対する嫌悪は，その反動として前線兵士に対する愛着という形で現われた。彼は1948年版の 'Farewell to Arms' に付した Introduction の中で次のように述べている。

.... wars are fought by the finest people that there are, or just say people, although the closer you are to where they are fighting, the finer people you meet; but they are made, provoked and initiated by straight economic rivalries and by swine that stand to profit from them.(23)

これは彼が第二次大戦に報道特派員として実際に参加し，前線兵士と行動を共にした際の実感といえる。彼は死に取り囲まれている前線兵士たちの連帯感，信頼感に感動し，彼らに愛着を感じていたように思われる。一方，彼らをそういう状況に強制している戦争の悪に対しては鋭い批判を加え，嫌悪感を表明しているのである。この嫌悪感は，Cantwell 大佐が部下と共に勝ち得た栄光を回想する時に，常にその裏面にいまわしい影となって現われるように，Hemingway の戦争に対する愛着の蔭にまとわり，彼に両面感情を惹起したように思われる。

以上，Henry，Jordan，Cantwell の戦争に対する嫌悪感を考察してきたが，Henry から Cantwell へとなるにつれて，嫌悪感が救いようもなく深くなってきていることに注意すべきである。Henry は戦争に対する幻滅感から Katherine との愛に逃がれ，Jordan は嫌悪を感じながらも，その理想により強固に支えられて使命を遂行した。しかし，Cantwell の場合は，心臓発作という逃れられない死が設定され，回想の中で，戦争への愛着と嫌悪を述べた後すぐ死ぬ運命にある。Cantwell は作者がその戦争への愛着と嫌悪を語らせるがために存在した人物であり，Hemingway は Cantwell を通して，彼の救いようもない嫌悪感のカタルシスを行なっていると考えられる。

Ⅳ

Ⅱ，Ⅲにおいて Hemingway の作品に見られる戦争に対する愛着，又，反面の嫌悪という umbivalence な態度について考察してきたが，その特殊性は Cantwell 大佐が，Renata に云わせているように，I hate it but Ilove it.[24] という戦争に対する好悪の感情が複雑にからみ合い，交錯している状態を示す言葉の中に見出された。そして注意すべきことは，この嫌悪感は軍隊の組織社会とか，権力に対する反抗という形をとらず，作者個人の嫌悪感の表明という感情的な段階で終始していることである。Hemingway の作品には，戦争の残酷さに対する嫌悪感，軍服政治家への痛烈な非難は見られるが，それはあくまで彼個人の感情の段階にとどまり，「裸者と死者」のハーン中尉が押しつぶされるのを承知で将軍に反抗したように，外に向けられた反抗の形をとることはなかったのである。

彼のこのような外的反抗として現われなかった嫌悪感は，戦争における個人の人格無視の一つの反動として，又，個性を回復できる一つの手段として，個人の heroism の強調へ向かわなければならなかった。例えば，Jordan の内的苦悩を考察すると，彼は確かに実行不可能のようにみえ，生命の損失を伴う橋梁爆破の命令逐行に対して様々に苦悩し，疑問も感ずる。しかし，命令に対する疑問が体制に対する反抗につながることはないのである。彼の心中に生ずる疑問，不安は彼の強力な super ego 的な意識により抑制され，逆に「命令を逐行するための道具」[22]に徹しようとする努力が払われる。即ち，Jordan の場合は，その体制における規律の下でいかに stoic に耐え，Hemingway の定める道徳律（moral code）—極限状況下における勇気ある行動—に従った行動をとるかが問題になるのである。Jordan の相克は，戦争に対する疑問，不安をいかにして彼自身から分離し，その道徳律に従って勇気ある行動をとるかについてなのである。

ここで前述の「命令を逐行するための道具」の意味を考えると，それは戦争における個人の人格を無視し，個人が一つの道具として規格化される考えを示している。しかし，Hemingway は Jordan を命令を逐行する道具として描いている一方，完全な道具となって命令を逐行する英雄的人間の意味も Jordan に与えているように考えられる。Hemingway はこれによって戦争で失われた個人の人格の回復を意図しているのである。

'For Whom the Bell Tolls' において，最後の場面に示される Jordan の英雄的行動は個人の価値，美徳を強調するものである。その世界は Hemingway 独自の道徳律によって支えられた行動重視の世界である。しかし，人間の道具化が極度に押し進められ，個人の存在が完全に無視される戦争社会において，個人の英雄像を強調することは空虚であり，又，無意味なように思われる。戦争において最も価値あるものとされる勇気，名誉は個人のものではなく団体のものであり，多くの生命の犠牲の上に成り立ち，その上，前述のように，それは個人の道具化を押し進めた結果得られた虚像にすぎないからである。

そのような虚像としかいいようのない heroism を強調し始めた時点から，この作品は実際の戦争とは乖離し，Hemingway 独特の道徳律の世界に移行するのである。その世界は，彼にとって，個性を無視した上で成立している戦争における個人の人格回復の手段であったように考えられる。Jordan の示す英雄像は，以上のような意味で，作者の戦争に対する嫌悪感の反動から生まれたものであり，虚像にすぎないといえる。

Hemingway の道徳律は彼の闘争への愛着が作らしめたものであり，日常性と相容れぬものであった。それが発揮される世界は，闘牛，狩，釣りや戦争などの闘争の世界である。このような死と暴力の世界において勇者となるには，その道徳律は必ず必要なものであり，それを獲得した者のみが勇者の資格を有するのである。それは彼の闘争への愛着の結晶であり，死と暴力の世界に生きる者が獲得を願望する一つの価値体系であったように考えられる。'Happy Life of Francis Macomber' において，妻に射ち殺された Macomber が何故，happy であったかはこれを物語っている。彼の生涯は勇者たるこの価値体系を獲得したが故に，短かくはあったが幸福であったのである。Hemingway は多くの作品においてこの価値体系を得ようと努力してついに獲得した勇者を描いている。

このような道徳律が最大に発揮される場は，戦争をおいて他になく，彼を戦争に引きつけた一つの理由となっている。しかし，彼が戦争に接近していった時に，その非情な残酷さや組織内の権力などから生ずる嫌悪感のために，戦争を彼の道徳律を示す場として見ることが実際にはできなかったように考えられる。前述のように一見，完全な英雄像のように見える Jordan は，Hemingway の道徳律を最大に具現する勇者であったが，実際の戦争から遊離した虚像であり，彼の戦争における個人回復の手段であった。Hemingway は Cantwell を通して，その苦苦しい嫌悪感を語らざるを得なかったのである。

Hemingwey が 'Across the River and into the Trees' において，戦争に対するすべての嫌悪感のカタル

シスを行なった後で到達した世界は，'The Old Man and the Sea' に見られる肯定に支えられた純粋な闘争の世界だったと考えられる。彼が戦争に見出した闘争の世界は，耐えがたい程の嫌悪感という否定的要素を伴うものであった。そこには真の栄光も名誉も存在せず，死と暴力の世界と偽瞞があるばかりであった。

しかし，'The Old Man and the Sea' において設定されている世界は，老人とマカジキという互いに敵でありながら，互いの立場，人格を認め合い，戦うにふさわしい相手としての二者しか存在していない世界である。そこには，もはや上官に命令され，命令逐行の道具として行動しなければならない兵士の非人間化された立場はないのである。

老人，Santiago は不漁続きの Salao の状態であり，餌の魚もない程，困ってはいるが，一日一杯のコーヒーがあれば足りるのであり，生活苦が彼をマカジキとの闘争に駆り立てる程の絶体性はない。戦争における上官の命令にあたる絶体的な必要性はないのである。従って，そこに存在するのは，上述のように何ものにも支配されない二者なのであり，これらの二者には，利害と権力を超越した純粋な闘争の姿が見出されるのである。

Heminywey が戦争に対する愛着と嫌悪という複雑にからみ合い交錯した世界を超越し，戦争に対する嫌悪感を浄化することができたのは，'Across the River and into the Trees' によってであったように思われる。この作品を書くことによって，彼は戦争に対する両面感情から逃がれ，大洋を媒介とした，老漁夫と巨大なマカジキとの闘争という純粋な闘争の世界に到達することができたのである。

Notes

(1) Ernest Hemingway, For Whom the Bell Tolls (Jonathan Cape, 1966) p. 288
(2) Ernest Hemingway, Death in the Afternoon, (Jonathan Cape, 1956) p. 10
(3) Ibid. p. 10
(4) Ernest Hemingay, Green Hills of Africa, (Penguin Books, 1966) p. 63
(5) Death in the Afternoon, p. 10
(6) Ernest Hemingway, The First Forty-nine Stories, (Jonathan Cape, 1956) p. 122
(7) For Whom the Bell Tolls, p. 131
(8) Ibid. p. 226
(9) Ernest Hemingway, Across the River and into the Trees, (Jonathan Cape, 1967) p. 40
(10) For Whom the Bell Tolls, p. 369
(11) Ibid. p. 407
(12) Ernest Hemingway, A Farewell to Arms, (Penguin Books, 1957) p. 33
(13) Ibid. p. 18
(14) Ibid. p. 37
(15) Ibid. p. 42
(16) Ibid. p. 175, 176
(17) Ibid. p. 143, 144
(18) For Whom the Bell Tolls, p. 45
(19) Ibid. p. 396
(20) Across the River and into the Trees, p. 194
(21) Ibid. p. 195
(22) Ibid. p. 202
(23) Robert O. Stephens, Hemingway's Nonfction, (Chapel Hill, 1968) p. 84
(24) Across the River and into the Trees, P. 108